

Title	教室に足を踏み入れるということ
Author(s)	楠本, 瑤子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 31-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5736
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

教室に足を踏み入れる ということ

楠本 瑤子

1. そこに立つ感覚

洛星高校のプロジェクトに関わってからというもの、母校でこそないが高校の教室というものに卒業以来再び足を踏み入れることになった。高校生のあいだは生徒として日常の当たり前の場として過ごしていた空間も、改めて見るととても不思議な空間に思えた。私は今、なぜここに立っているのか。このざわざわとした感覚は何なのだろうか。

また、今年度の授業でこのようなことがあった。初回から数回授業を重ねてきて、どうにも授業の雰囲気固い。普段接していない私たちが行くのだからなかなか難しいことではあるが、それでもなんとか授業の雰囲気を和らげたいと思いコミュニティボールを使った授業を試みることにした。その際ほぼ直感的に「机と椅子が邪魔！」と感じて机と椅子を端に寄せ、円になって床に座ってみた。それが効果を発揮したのか、はたまたコミュニティボールのおかげなのかはよくわからないけれども、受講生はリラックスして話を

し始めたように感じた。この変化はどうして起きたのだろうか。

私たちが教室に足を踏み入れそこで授業をすることがどういうことなのか、この機会に改めて考えてみたいと思う。

2. 教室という空間

そもそも教室というのはどういう場所なのだろう。教室と言われてまず思い浮かびそうなのが、黒板、机と椅子、教卓、教壇などだ。学校の教室にはだいたいあって当たり前のものである。これらのアイテムをヒントに、教室の場所の特徴を探ってみよう。

まずは黒板から。授業で使う黒板はだいたい教室の前方にある。洛星高校でも前後にあるが、授業で使用するのは前のものだ。そしてそこに床より少し高い教壇と教卓が据え置かれている。先生は教室にやってきて教壇に上り、授業をする。先生は教室の前にいることになる。さらに机と椅子がある。生徒が座る椅子は必ず前を向いている。教室の前で行なわれる授業が見えるようになっている。

ここからわかることは、先生は教室の前、生徒は教室の後ろにいて、互いに向かい合えるようになっているということであり、加えて言うならば、先生と生徒の配置は予めきちんと決まっ

ているということである。先生の授業を、生徒は受ける。教室とは先生と生徒がはっきりと区別されている、先生が生徒に教えるといった、授業やそのときのふるまいが染み込んだ場所と言えるだろう。

3. どういう関わり方ができるのか

私たちが洛星高校の教室に足を踏み入れるとき、私たちは生徒でも、先生でもない。私たちの身分は学生だし、洛星高校の生徒でもないのだ。このことは研究会の発言の中の「先生と生徒という縦の関係ではなく、生徒と学生といういわば斜めの関係」という言葉からもわかるだろう。では、そのような関係で行なわれる授業とは、いったいどういうものなのだろう。

それは、いわゆる先生が発する情報を生徒が黙って受けるという授業ではない。こちらが持って行った哲学的な対話法やワークを使って、テーマについて考えてもらう。そこに重点を置いている。投げっ放しではなくて、返ってくるボールを待って、キャッチするのも仕事だ。どちらかという共同作業と言ったほうが近いだろうか。

ということは、先生が生徒に何かを伝えるという授業にふさわしいように配置されている教室は、私たちにとってはほんの少し不便なことになる。私

が直感的に机と椅子が邪魔だと思ったのも、生徒たちが机と椅子を取っ払った状態でリラックスして見えたのも、受講理由に「普通の授業と少し違う感じがしたから」というものがあつたのも、これが大きな原因であるように思う。一方向の教室を、ほんの少し共同作業用に動かし、受講生と私たちがともに考え、対話を通して学ぶ。私たちは受講生と、そのような作業のパートナーとしての関係を結ぼうとしているのかもしれない。

4. それでも、授業

しかしそれでも、私たちが洛星高校でしていることは授業である。これは毎回授業に行くときに感じることはあるが、やはり私たちは学生であっても、あの教室に足を踏み入れれば講師であり、「先生」として見られている。その上での社会的責任もある。教室の配置を少し工夫して動かし、普通一方向の授業が双方向に近づいたとは言っても、私たちが授業でしていることは、一方向の授業とはまた別の仕方ですべて「教えている」のだし、表面的な双方向形式の奥底に一方向性があることも確かだ。ということは、やはり私たちは学校で、教室で、授業をするということに立ち戻らざるを得ない。

となれば、3で述べたような「斜め

の関係」に何かできることがあるとすれば、少し先輩の私たちから、普通の授業とは違うことを違うかたちで贈ることと、彼らの高校生活に何か新鮮な風を送ることではないだろうか。私が教室に足を踏み入れた時のあのざわざわとした感覚は、そのような微妙なバランスで成り立っている授業だからこそそのものなのかもしれない。

(くすもと ようこ)

